

2011年（平成23年）9月22日（木）東奥日報に掲載

## ①「命の大切さ体で感じる」

動物を飼うということは、以前は犬では用心のための番犬や、愛がん動物として可愛がるために飼っていましたが、近年の少子化、高齢化という社会の変化の中で人は人生の良き伴侶（コンパニオンアニマル）として、また家族の一員として、絆を強く深めるようになってきました。



また、本県で動物を飼っている人も増加傾向にあり、犬で見ると、20年前の平成2年の犬登録頭数が約5万頭でしたが、平成22年の犬登録頭数は約74,000頭で約50%増加しています。更にねこやうさぎ、ハムスターなど様々な動物を飼っている人もいますので、本県で動物を飼っている人は相当多くいると思われます。

当センターでは、このような社会の変化やニーズに応えるため、動物

を介在させたさまざまな活動を行っています。

その一つは、幼稚園や保育園、小学校など多くの子供たちが動物とのふれあいを通じて命の大切さややさしい心を育むための活動です。子供たちに「命」というものを理解してもらうため言葉で説明するのは難しいのですが、聴診器を使って自分の心臓、友だちの心臓、動物の心臓の音を聞かせると、子供たちはその驚きを「ドキドキしている」とか「すげえ、犬の心臓、おらのより早え～」など自分の言葉で教えてくれます。このように動物とふれあうことで、子供たちが一つ一つ発見したパズルをつなぎ合わせることで「命」についてイメージしていると考えています。

また、動物とのふれあいが高齢者などの心を癒す効果があると知られており、社会福祉施設や病院へ動物を連れて訪問活動を行っています。

参加者には体が不自由な人や寝たきりの人もいるので、最初の頃は、われわれも施設側も手探りの状態で不安がありましたが、多くの施設で「普段表情のない〇〇さんが笑った」とか「普段話さない〇〇さんが犬の名前を呼んだ」など期待以上の効果を実感することができ、われわれもやりがいを感じています。

当センターでは県民一人ひとりが動物を愛する気持ちと動物の正しい飼い方について知識や理解を深めることができるよう様々な取り組みを行っていますので、次回からも本県におけるペットの飼育事情を述べながら取り組みを紹介していきます。